

氏名 氏名 陳小珍 (チン ショウチン)
学位 博士 (中国言語文化学)
学位記番号
学位授与年月日
審査研究科 外国語学研究科
論文題目 論文主題 五臣注《文選》の音韻研究
副題目 —朝鮮本を中心にして—
論文審査委員 (主査) 大東文化大学教授 氏名 丁 鋒
(副査) 大東文化大学教授 氏名 瀬戸口 律子
(副査) 大東文化大学教授 氏名 門脇 廣文
(副査) 東京国際大学教授 氏名 林 慶勲

博士論文 審査報告

この部分に掲載されている内容については、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨に関する箇所では無い為、加工がされておりますので、ご了承願います。

2. 研究方法、論文の構成と内容

本論文は五臣音注音韻状況の全容解明を目指し、総合的に研究を展開するにあたって、主に比較法、

統計法、考証法、挙例法、分析法など研究手法で考察を進めている。比較法は各版本の比較、各版本内の音注用字の比較、《文選》諸注釈本の音注の比較、朝鮮本の音注特徴と当時の韻書《王三》（王仁昫《刊謬補闕切韻》故宮蔵本の略称）との比較、五臣注音韻特徴と唐代諸文献音韻との比較などであり、統計法は各比較作業の結果を示す全てのデータを計数し、また五臣注の全七千個の音注に対して、音韻特徴による分類上の傾向を結論に利用していることであり、考証法は主に版本の時代研究、五臣の研究、五臣注の評価に巡る研究、音韻史特徴の研究などである。多分野（文学、文献学、訓詁学、音韻学など）関連の歴史文献に対して、それぞれの資料分析に学術性を有する最も適切かつ有効な方法を運用するのが本論文の出発点である。

本論文の構成は次の通り（章、節を示し、小節は省略）である。

★目次

第一章 序論

1.1 研究範囲と問題意識

1.2 研究目的と価値

1.3 先行研究

1.4 研究方法

1.5 本論文の構成

第二章 五臣注《文選》の編纂と現存する諸版本

2.1 《文選》及びその注釈本

2.2 五臣注の流行と批判の意見

2.3 五臣注《文選》の撰者

2.4 現存する五臣注《文選》諸本とその音注

2.5 本章の主要な結論

第三章 朝鮮本五臣注《文選》の音注整理

3.1 《文選》五臣音注と先行音注との関係

3.2 朝鮮本と陳刻本の音注問題

3.3 「叶韻」音および韻書にない被注字と又音

3.4 五臣音注と《王三》の同出字

3.5 本章の主要な結論

第四章 五臣音注の声母体系

4.1 唇音

4.2 舌音

4.3 齒音

4.4 牙喉音

4.5 本章の主要な結論

第五章 五臣音注の韻母体系（上）

5.1 重韻

5.2 重紐韻

5.3 三等韻と四等韻

5.4 本章の主要な結論

第六章 五臣音注の韻母体系（下）

6.1 同摂異等韻の通用例

6.2 異摂同等・異等韻の通用例

6.3 開口韻と合口韻の通用例

6.4 陰声韻・陽声韻・入声韻

6.5 本章の主要な結論

第七章 五臣音注の声調体系

7.1 五臣音注の四声独立

7.2 四声における混同例

7.3 全濁上声字の去声化

7.4 本章の主要な結論

第八章 終論

8.1 本研究の主要な結論

8.2 本研究の成果と今後の課題

付録：五臣音注・《王三》同音字表

参考文献

本論文は全八章から構成している。第一章は序論であり、研究範囲と問題意識、研究目的と研究価値、先行研究、研究方法、論文構成について述べている。第二章は五臣注《文選》の編纂と現存する諸版本について紹介している。本章は現存する五臣注の版本を網羅し、残巻本である集注本、天理本、杭州本の音注を掲出し、完全本と比較した。結果として、完全本である朝鮮本、陳刻本、六家本の内に、朝鮮本は陳刻本より集注本・天理本・杭州本・六家本と近似し、最も原本に近い性格を持っていることが分かり、朝鮮本（1509年朝鮮正徳年刊行、東京大学図書館現蔵）は五臣注研究に最良な底本である結論を出した。第三章は朝鮮本五臣注の音注を整理する成果である。本章は先ず近代著名学者黃侃の「五臣音注前作伝承説」（“必因仍前作”）に対して諸版本音注の逐一比較を行い、五臣音注は前作の李善、公孫羅の音注に比べ、大半は異なっていることを判明し、五臣音注の独自性を証明した。また、朝鮮本の全音注に対して、陳刻本（約1161年）音注との照合、協音（古詩の脚韻に対する一種の音注解釈）や韻書に収めていない被音注字と又音（多音字の別音）の区分、朝鮮本音注字と韻書《王三》の同収字の認定など分類の結果を複数の表にしながら明示し、次章からの音韻研究に必要な音注データを整えた。

第四章から第七章が本論である音韻論にあたり、中国語の音韻特徴によって声母体系、韻母体系、声調体系に分かれる。第四章の声母研究は中国音韻論の声母分類法の「五音」（唇音、舌音、歯音、牙音、喉音）順に五臣音注の声類特徴を分析し、結論として五臣音注の声母体系は声母40個あり、混同例の

分析によって整理した主な声類特徴 ①「軽唇音は既に派生したが、明母と微母の混同例はまだ見られる。②舌上音は独立したが、端母と知母の「類隔切」がまだある。③邪母と從母、俟母と崇母が混同している。④船母と常母は合流している。⑤泥母、日母、娘母はそれぞれ独立している。⑥知組、莊組、章組は合流していない。⑦全濁音声母¹の無声化は始まっている。など）は五臣音注の独自色と見做され、初めての発見である。第五章と第六章の韻母研究は「重韻」、「重紐」、「同摂異等韻」、「異摂同等韻」、「異摂異等韻」、「開口韻と合口韻」、「陰声韻・陽声韻・入声韻」²など側面から韻母体系を総合的に考察した。研究結果として、五臣音注の韻類は 42 個あり、韻母体系の最も重要な特徴は：①「重韻」（一等韻、二等韻、三等韻）の合流。②「重紐」の混同（重紐三等韻と普通三等韻、重紐四等韻と純三等韻）③三等韻と四等韻の混同。④複数存在する関連韻の通用（通摄入声と江摄入声、虞韻と模韻・尤韻・侯韻、蕭韻・宵韻 A 類と肴韻、麻韻二等と佳韻・皆韻、陽韻と唐韻、蒸韻と登韻など）。⑤入声韻の韻尾の脱落などである。また、①重紐三等と四等が混同しない、②虞韻と魚韻が混同しない、③元韻と痕韻・魂韻が混同しないなど現象も指摘され、重要視されるべき発見である。第七章は五臣音注の声調研究として、結論は以下の三点となる：①平声、上声、去声、入声の中古四声は各自独立している。②全濁音上声字の去声化は既に発生している。③声調の音価は平声と去声の差が最も大きく、上声は平声・去声の特徴を兼ね、入声は去声と最も近似する。

第八章は終論であり、主要な結論、研究成果と今後の課題について纏めている。文末には「五臣音注・《王三》同音字表」（約 100 頁）を付録している。

3. 研究の成果および評価

本論文の主な研究成果は以下の三点にある。

(1) 版本の整理。現存する3種類7つの五臣注版本（単注本四つ、六家注本二つ、集注本一つ）を収集し、各版本の音注を比較して最良の版本を確定し、校勘を行った。各版本の比較を通して、朝鮮本が現存する最良の版本であることが判明した。

¹ 此處は中国音韻学の声母（頭子音）に関する用語が多数含んでいる。「軽唇音」は現代音声学の唇歯音である。「明母、微母、知母」などは中古時代三十六字母（声母）の名称である。「舌上音」は「舌音」の下位分類である。「類隔切」は舌音二類の音注字の混同現象を指す。「知組」、「端組」などの「組」は声母の同発音部位のグループ分類名称。「全濁音」は破裂音、破擦音と摩擦音の有声子音を指す。

² 此處は中国語音韻学の韻母（音節における頭子音以降の部分）に関する用語が多數含んでいる。「重韻」は同摂内の同等韻を指し、「摂」は韻母グループの分類（全十六摂）であり、「等」は韻図の中、一行目から四行目に配置した韻の名称（一等から四等まで）である。「重紐」は三等韻の八韻に十個の声母の元に二類（重紐三等と重紐四等）の韻母が存在する特殊な現象である。「合口」はu類介音や主母音を有する韻、「開口」は「合口」以外の韻。「陰声」、「陽声」、「入声」はそれぞれ母音韻尾、鼻音韻尾、閉鎖音韻尾を指す。以下の「虞韻」、「模韻」などは中古時代《切韻》《廣韻》など韻書にある韻目の名称である。

(2) 音注の整理。①集注本など残巻に保存された音注と朝鮮本音注の一致性から、朝鮮本の音注が五臣注本来の姿を保ち、後人に改竄されていないことを明らかした。②朝鮮本と陳刻本の相異音注について、正誤を判断して、誤記音注を訂正した。③朝鮮本音注を音韻性格（韻書未収字、協音字、多音字など）による分類を行った。④朝鮮本の全て七千個の音注をデータ化した。

(3) 五臣音注の音韻研究。①朝鮮本音注と《王三》所収字の同音字表を作成した。②《王三》との比較分析から、五臣音注には声母40個、韻部42個、声調4個あるという結論を出して、音韻体系の全容を解明した。③五臣音注の混同例を整理し、声類、韻類、調類の特徴と音変化の傾向をそれぞれ突き止めた。④五臣音注が8世紀頃の北方標準語の音韻特徴を反映している、という性格を明らかにした。

本論文は八世紀中国を代表する文献《文選》の注釈書の綜合研究として、中国の《文選》注釈史、《文選》版本史、《文選》音注史、中古音韻史の空白を埋め、課題の重要性、専門性と学術性が高く評価できる。音韻学の側面からは、今まで唐代の音韻史に利用している研究成果は《博雅音》、李善《文選》音注、《玄應音義》、《慧琳音義》、《晋書》音注、《五經文字》音注、敦煌文献の異文資料など数種類の音韻体系に過ぎなく、本論文の五臣《文選》音注の研究成果は唐代音韻の解明、または日本の漢音研究において参考価値が高いことは言うまでもない。また《文選》は文学史上重要な文献であり、本論文の研究成果は《文選》の解釈やテキストの利用に対する価値も無視できない。

本論文の音韻研究の発見は多数あり、五臣音注の音韻体系の独自性は今までの研究におけるあらゆる唐代音韻資料が反映した音韻特徴と体系的に異なり、唐代音韻史の再認識に役立つ。また、《王三》音系と五臣音注との比較から認められた多くの混同傾向は中古時代の音声分布と音声変化の解明に重要な根拠を提供した。本論文が残した課題を完成させ、修正版が出版できれば、中国音韻研究に大いに寄与できるはずである。

本論文は厖大な資料と複数の版本から七千個に上る音注の確認・掲出・比較・分析・入力・分類などデータ作成に根気よく取り組んだ結果である。日頃、語学データの構築に厳密かつ正確に行う態度は研究成果に反映され、丁寧な作業を通して導き出した結論には説得力がある。

本研究に対して、各委員から「この論文は真摯な態度と忍耐力によって出来上がった労作であり、高く評価できる」、「課題設定の明確性、方法の妥当性、論述の一貫性、構築の適切性、表現の有効性、学術性と社会貢献など博士論文評価の要点をあげると、よくできた論文である」などのコメントがあり、高い評価を得た一方、多音字音注の整理、注釈の配置、通し番号、参考文献などの書き方についての改善の指摘があった。

4. 結論

以上の審査内容、評価に基づき、本論文を審査対象とする学位論文審査委員会は、全員一致をもって、本論文は博士（中国言語文化学）の学位を授与するに値するものと判断し、ここに報告する。

以上